

---

# 緋弾のARIA ~死に生を与える者~

勇者

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

緋弾のアリア 〈死に生を与える者〉

### 【Nコード】

N2404BA

### 【作者名】

勇者

### 【あらすじ】

目が覚めると真っ白な空間のなかにいた前田 響は出てきた美少女によって緋弾のアリアの世界に転生させられる。そして、死んだ者に生を与える能力を持つ、それがきっかけで二つ名はネクロマンサー、アリア達と楽しくやっていく

## 転生

「あれ？ここどこだ？」

俺は今、真っ白な空間のなかにいる

「確か俺は……あれ？思い出せない……どうなってんだ？」

そんなことを考えていたら俺の前に美少女が出てきた

「ん？どっから湧いてきたんだよ」

「私はゴキブリじゃない！！」

そう言っ頭を叩いてきた。あ、思い出した。俺の名前は前田  
だっただ

まえだきょう  
響2

「まあそんなのどうでもいいけど……君迷子？残念だけど、俺も迷子だから……」

「私は迷子じゃないよ！！君を助けにきたんだよ！！」

「助ける？どっいう意味？」

「そのままの意味だよ。君が私の手違いで死んじゃったから私が行き返してあげるんだよ」

「それは助けるじゃなくてお詫びじゃないの？まあそんなのどうで

もいいけど……じゃあ早く元の世界に戻してよ」

「あ、それは無理。だって元の世界では今火葬中だから……だから  
適当な世界に飛ばす」

「……は？え、ちょっと待て。適当な世界に飛ばす？それだったら死んだ方がいい」

「そういう訳にもいかないんだよ。だってミスっちゃったことがお父様にばれたら面倒なんだもん」

「もういい、わかったからさっさと飛ばしてくれ。君といたら頭が悪くなりそうだよ」

「む、失礼な。あの、申しにくいんだけど……転生するはいいんだけど、そこが物騒な世界なの」

「……は？おまえはバカなのか？誰がそんなところに行くか、他にしろ」

「そこにしか飛ばせないんだよ。だから転生特典として3つぐらいねがいを叶えてあげる」

「ねがいを叶える？おまえはバカなのか？」

「バカじゃない！私は神様だからできるの」

「じゃあ元の世界に戻してください」

「それ以外で」

「いつそのこと殺してくれ」

「だからそれやっちゃダメなんだって」

「せめてそこがどんな世界なのか教えてくれ」

「君の世界にもあると思うけど緋弾のアリアの世界だよ」

「ああ、なんだ友達が勧めてきたラブコメか。あれ読まなかったんだよな」

「あれはラブコメじゃないよ。あれ、れっきとしたガンアクションとかだったと思うよ」

「じゃあそこに行くんなら……あれだ………えーと、そう！武器よこせ」

「え！？それが出てこなかったの！？まあ渡すけど。あ、これは願いにカウントしなくていいから」

「え、マジで？やった。後は………死んだやつを生き返らせる能力。あ、これはさじ加減次第でゾンビにできる設定で」

「わかった。今やった。で、後二つは？」

「絶対的な実力で」

「あ、それは無理。潜在能力をすべて引き出すのはできるけど」

「ちなみに潜在能力をすべて引き出すとどれくらい強いのか？」

「人間の潜在能力はすごいよ君のは特に優れているから………足技だけでゴジラを殺せるくらいかな」

「………人間ってめちゃくちゃだな」

「まあ、人間って実力の何割も出してないって言うしね」

「じゃあそれでいい。後、俺は一分以内に十回死なないと死ねないとかどうかな？もちろん不老」

「………君はよくそんなこと思い浮かぶよね普通は不老不死だろ」

「そうか？不老不死だと死ねないからきつと辛いぞ」

「なるほど。まあ、これで終わりと言いたいところだけど、君は気に入ってしまったから、特別に私の未来の夫にしてあげる」

「いらない、そんなのもらつんだつら金を貰う」

「ケチ、そういえばお金ないしあげるよ」

「やった。ってこれめちゃくちゃ入ってるじゃないか」

「そりゃまあ私の未来の夫のために全財産あげてもおかしくないでしょ」

「ふーん、どうやったら2億って単位がたまんだよ」

「宝くじ。まあそろそろ送るから、響君あなたは転校生として東京武偵高に行くことになってるから」

「わかったけど武器は？」

「君が想像したら想像した通りの武器が出てくるよ」

「そんなの頼んでないけどなまあ、ありがとう」

「行ってらっしゃい、ダーリン」

「誰がダーリンだ!？」

「そこは行ってらっしゃいハニーでしょ」

「知らん早く飛ばせ」

「バイバイ」

美少女がそう言つと目の前が真っ暗になった

## 出会い（前書き）

更新ペースが遅いですね

## 出会い

「……………えーと、確か俺神様に手違いで死んじゃったから、転生されたんだよな。ここどこだ？ってか、本当に想像した通りの武器が出てくるのかね？ちょっとやってみるか」

元の世界の実家にあつたでかい刀、確か太刀？を想像してみた

「うおっ、本当に出てきたし。切れるのかな？地面でも切ろうかな」  
地面に切りつけるときれいに切れた

「切れ味いいな。この刀どうやって消すんだろ。想像すれば消えるかな」

あら不思議、あっという間に消えちゃった

「おお、確認できたし、ここがどこか人に聞いてみるか……………って人がいないし。確か俺は東京武偵高に行くことになってるんだよな。東京武偵高って高校か？ダッサイ名前だな」

ん？人影が見えるぞ

「おーい、東京武偵高ってどこか知ってるか？」

「危ないからどけー！」

どいたらすごいスピードで自転車が通っていった。正確には今年のがキ使に使われたセグウェイってやつも通っていった。でもガキ使

とは違って、地デジ力ではなくマシンガンみたいなのが乗っていた。爆弾がどうのこうのって言って

「ちよっ、東京武偵高ってどこにあるんだよ！」

俺は全力で走って自転車を追いかけたつもりだったが

「あれ？自転車が後ろに見えるぞ？俺の錯覚かな？」

錯覚ではなかった。自転車とセグウェイを抜かしてしまった。自転車に乗ってるやつ驚いてるぞ

「おい来るな！この自転車には爆弾が仕掛けられている！」

ん？俺に驚いてないな、俺の先を見てやがる

「うわっ、美少女かパラグライダーで降りてきやがるし」

「そっちの走ってるあんた！どきなさい邪魔よ！」

「そうだよな。どいた方がいいよな。だから銃を撃たないで！」

「あんたに向かつては撃たないわよ！あっちのUSIに撃つのよ」

「USI？なんだそれ？って危ねっ」

パラグライダーを避けると美少女が銃をセグウェイの上に乗っているマシンガンみたいなのに撃った。そしてそのまま自転車に乗ってるやつを抱いてどっかに行った。

「東京武偵高つてどこにあるか教えてくれよおお」

ドシャーン、叫ぶと同時に自転車が爆発して俺も巻き込まれて死んでしまった

「痛っ、死なないとはいえ死の痛みはすごく痛いな」

ただいま喋れるけど手足再生中のため動けない

「いやー、酷いものだな。本当に物騒な世界なんだな。こんなところに飛ばすなよ。きつと俺のご先祖様が可哀想だつて泣いてるぜ」

「ちなみに元の世界では前田 利家という人の子孫なんだよ」

「おっ体が動くようになったな。東京武偵高がどこにあるか聞きたさっきの不幸少年と美少女の飛んでつたところに行こうかな」

全力で走って落ちていったと思われる場所へ行った

.....

「た、助けてえええ、死ぬううう、あ、今死んだ助けてえええマジで死ぬううう」

なぜこうなつたんだよ説明してくれ！まわり俺しかいねえし

「ヤバイよヤバイよお。死んじゃうぞ早く一分たたないと死んじゃ

うぞ俺。助けてえええ」

叫んでもなにも来ないから回想してみよう。誰だ今走馬灯って言ったやつ。出てこい射殺してやる！

.....

「えーと、確かあっち方面に行ってたな」

ただいま、ボトさんを越える速さで走っています

「ん？さっきと同じセグウェイじゃないか。物騒過ぎるだろ。この世界、あんなの道にあるんだったら一生家にいるわ！」

太刀を想像して作り上げた。今頃だけどあれだな、この能力ってf

te stay night に出てくる衛宮士郎の投影だなマジで

「ていつ、ほう、やつ」

前にあったセグウェイに乗ってるマシンガンみたいなのを切った。すると、残りのやつがすべて俺に銃口を向けた

「え、ちよっ、マジで？やったらダメだった？に、逃げる」

そうして追いかけられるようになった

.....

「ん？建物がある！とりあえず逃げ込もう」

全力で走り続け、やっとかくれた。今、戦えよとか言ったやつ。俺は戦いながら来たぞ一応

「うわっ変態だ！こっちも危険だ」

目の前にさっきの美少女が自転車に乗ってるやつに抱かれていた。

「違う俺は変態なんかじゃない」

「知ってるかお前、少女の反応から言う同意じゃないだろ。ってことは強制猥褻だ」

「とりあえずあのおもちやを破壊しないとね」

変態不幸少年がセグウェイの方向へ向かい銃弾をすべて避けた

「うわっ強すぎるだろこいつも潜在能力をすべて引き出してるんじゃないか」

「こいつもって何よ」

「何よってなんだよ。お前は黙っててくれたらありがたい。いや黙ってくれ」

「あんたいきなり来て何言ってるのよ！名前を言いなさい！」

「田中太郎だ」

「嘘よそんなどこにでもいそうな名前なんてそんなにいなわ！」

「今のその発言全国にいる田中太郎さんに謝れ！そして東京武偵高がどこにあるか教えて死ね」

「はあ？もう頭にきた。風穴開けてやる！」

「1回ぐらい開けられても別に死なないしいよ。だが、撃たれたら遠慮なく額に穴を開けてゾンビにしてやる」

「ゾンビ？そんなのできるわけないじゃない頭おかしいんじゃないの？それに見たところ何も装備してないのにどうやって穴？開けんのよ」

「あ、俺も頭にきた。殺すっ！」

自分でも驚くぐらい殺気を出し、手をポケットに入れて想像して以前興味本意で調べた最強の拳銃、パイファー・ツェリス力を取り出した

「待つんだ。君が話しているのを聞こえてしまったけど、武偵高転校してきたんだろ。じゃあ殺したらダメだし、女の子には優しくしないといけないよ。しかももう遅刻だから、俺と一緒に行くっ」

手を押さえられながら言われた

「あ、そうだった。武偵高へ行かなきゃならないんだった。じゃあ

行くか。案内してくれ」

パイファー・ツェリスカをポケットに入れて消してから殺気も消した

「待ちなさいそっちの強糺魔あんたは逮捕するっ！」

「アリア、あれは不慮の事故だよ」

「早く行こうぜ。転校初日が大切だろ」

「ちょっと待ってくれ」

そういった後、なぜか変態不幸少年とイライラするやつが戦闘になった

「うわっ、圧倒的だな。しかし子供相手に大人げないな」

あ、今イライラするやつがこけた

「さて早く行こうか」

「やっとか」

変態不幸少年の足の速さに会わせてその場から去っていった

.....

これがいずれ『ネクロマンサー蘇生者』と呼ばれることになる俺と『カトラ双剣双銃』と呼ばれている神崎・H・アリアとHSSを持つ遠山キンジの出会い

だ  
っ  
た

出会い(後書き)

うーん、いつ主人公紹介しようかな

## 転校

「なあ、変態不幸少年、武偵つてのはなんなんだ？」

俺と変態不幸少年は今始業式に出ていた

「変態じゃないし俺は遠山キンジだ。お前は武偵が何かも知らないで転校してきたのか？お前バカだろ」

「俺はバカじゃない天才だ以後気をつけるじゃないと殺す」

「だから武偵は人を殺したらダメなんだって」

「わかった殺さないよ多分」

「多分じゃダメだ。ってか普通は殺したらダメだろ」

「大丈夫だ死んだら生き返らせる」

「死んだら生き返らねえよ絶対に」

できるんだよなあ俺には

「そうだな。ってか校長の話長いな」

「それはどこも同じだろ。お前の元いた学校だってそうだっただろ」

「さあどうだったかな。忘れてしまったな」

「ふーん、そういうものか」

「そういうもんだ。お、話終わったな」

「お前は手続きしないとイケないだろ」

「お前つてのはやめてくれ。響さんか響と呼べ」

「じゃあ、響は今から教務科マスタースに行かないとダメなんだろ？」

「そうだな。キンジ、一緒にクラスになればいいな」

「ああ、そうだな。教務科は危険だから気をつけるよ」

「んじゃ行ってくるわ」

キンジと俺はそう言って別れた

.....

「あなたが前田 響君ね。私は2年A組の担任の高天原ゆとりです。後一人転校生が来るのだけど前田君知らない？」

「俺が知ってると思いますか？ここにきて知った人は遠山キンジと後アリアとか呼ばれてた人だけですよ」

「アリアさんって神崎・H・アリア？」

「知りません」

「すみません遅れました」

アニメ声をしてちっちゃいピンクのツインテールが入ってきた

「神崎さん、次からはあまり遅刻しないようにね」

先生が言ったけど神崎は俺を見てなにか言いたそうだ

「なんだ神崎、言いたいことがあるなら言え」

「あんださつきはよくもやったわね」

「で、なんだ。終わりか？」

「はいはい、そこまです。時間ですからそろそろ行きますよ」

高天原先生が歩いていった

「はい、わかりました行きましょう」

俺がついて行った

「待ちなさい！」

神崎もついてきた

.....

「今日は転校生が二人います」

高天原先生が喋っている。俺と神崎は廊下で立っている

「二人とも入ってきて」

俺と神崎は入った

「前田君から自己紹介して」

「前田 響ですよろしくお願いします」

俺は前にいる生徒たちを見渡した。

……………あ、キンジ発見

「キンジこれ」

神崎がベルトをキンジに投げた

「理子分かつちゃった。これフラグたってるよ」

うーん、ここの第一印象は騒がしいだな

タァンタァン

神崎が銃で壁を撃った

「恋愛なんてくっだらなーーーーー」

あ、このセリフは友達が女性にフラれた後にその瞬間を見ていた俺に言った言葉だな

にしても神崎が言っと友達なんかより納得できるな

「俺の席は適当でいいです。できれば神崎とは離してください」

「何言ってるのよ。私の話聞いてなかったの？あんたは私の隣よ」

「……………はあ、もういい」

俺は席についた

……………  
なんかかんやで昼休みになった

「はあ、マジで疲れた。学科って何だよ何種類あるんだよ」

キンジに愚痴った

「確か10個ぐらいだろ」

「違うわ！14個だよ教務科合わせて15個」

「知ってるのかよ」

「当たり前だ。俺には瞬間記憶という能力が備わっていたんだよ。一度聞いたり見たりしたら覚えてしまっただよ」

「スゴいな」

「そういえばキンジは学科何なんだ？」

「インケスタ  
探偵科だよ」

「ふーん、じゃあ俺はSSRかアンビュランス救護科かアサルト強襲科にしようかな」

「何で俺に聞いたんだよ」

「何となくだ」

キンコーンカーンコーン

「お、午後の時間だな。俺は教務科に行かないといけないからまた  
な」

そう言って俺はキンジと別れた

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2404ba/>

---

緋弾のアリア ~死に生を与える者~

2012年1月9日04時50分発行